

サハリのせいで救われない日本の女

——異文化文献を読み違えて得たアイデア——

小 林 信 彦*

古代の日本人によると、女は生きている間に決して幸せになれませんし、死後に安らぎを得ることもできません。嫉妬や軽率や愚かさや気まぐれなど、生まれつき女の心は欠陥に満ちているからです。このような欠陥は罪と見なされ、“誰のせいでもなく、女自身が責任を負うしかない”と言われました。

このことは仏教文献に出典根拠があると日本人は信じていました。しかしながら、女の心に固有の欠陥について、仏教文献のテキストには何の記述も見られません。その代わりに、“ブツダになる準備をする上で、女の身体は不利である”と言われます。“月経、悪阻、陣痛など、生殖機能にかかわる生理現象のせいで、ブツダになる準備がはかどらず、女の身体は不利である”と言うのです。

女の身体に認められる不利な点に言及する仏教文献の言葉は、仏教を体系として理解できなかった日本人に読み間違えられて、女の心に内在する欠陥を意味すると受け取られました。こうして、“女は生まれつき罪深い。したがって、全く救い難い”という有名な命題が成立して、1000年以上にわたって女を苦しめることが正当化されたのです。

インド人が何を考えているかを知る気もなく、インドの文化について何の関心もないのに、日本人は何となく日本が仏教国であるような気がするの、日本とインドが文化遺産を共有するのではあるまいかとぼんやり考えています。もしそうなら、世のムジャウ（無常）を貴ぶ文化、ムガ（無我）の境地を求める文化がヒマラヤの彼方にもあったことになり、そこでは人が死ぬとみなブツ（佛）になり、それどころか草や木もジャウブツ（成佛）したことになるでしょう。そして、サハリ（障）ゆえに、罪深い女が責められ蔑まれていたことになりましょう。

本当にそうなのか、あるいはそうでないのか。日本人は確かめようとさえしません。すべては薄ぼんやりしたままです。自分たちの文化の重大な局面について、好奇心がまるで欠けているかのようです。こういうわけで、“アジアは一つ”というありふれた命題についてさえ、これを口にするにはあっても、その真偽を判定することができません。「アジア」の中で日本文化を位置付けることができないのです。

日本文化の位置付けさえできないのであれば、日本で国際文化学が学問として成り立つこともありえません。これはいささか困ったことですので、今回は先ず手初めに、昔から日本

*本学文学部

キーワード：心の移転、一時的に心が宿る身体、理解しがたい異文化、国際文化学

で女に生まれつきの欠陥と言われるサハリを取り上げて、この問題の一端に取り組んでみたいと思います。

A¹ 「心の移転」

インド人にとりまして、死は身体のみ起こることであり、心にかかわることはありません。心は消えることがなく、いつまでも機能し続けます。インドの心は死んだ身体を離脱して、今まで縁もゆかりもなかった人間の女、または動物の雌の体内にはいり込み、セックスが行われるのを待ちます。男または雄から出た精液一滴と女または雌から出た血液一滴が合体すると、その瞬間に待機していた心はそれに侵入します。

こうして新しい胚が発生し、それが次第に成長して、やがて体外に出て出産となり、新しい生涯が始まります。新しく心が宿った身体も、やがていつか死にます。そして、心はさらに次の身体に移動します。この「心の移転」のプロセスはいつまでも繰り返され、止まることはありません。人間や動物が親から受け継ぐのは身体だけで、心は親以外の者から受け継ぎます。身体の継承と「心の移転」は、全く体系を異にするのです。我々の心は縁もゆかりもない人間あるいは動物から来たものなのです。

新しい胚が発生してから誕生するまでに、それまで心が保持していた記憶はすべて失われ、新しい生涯は白紙の状態が始まります。胎児が狭い腔を通過する際に、あまりの苦しさに、それまでに覚えていたことをすっかり忘れてしまうのです。記憶に関する限り、新しい生涯は前の生涯の続きではなく、前の生涯から完全に切り離されています。

次の生涯に持ち越されるものは、心が関与した「行い」の結果です。人間または動物が何かの「行い」をしますと、その度にエネルギーが発生します。このエネルギーは心の最も深い部分に蓄えられます。「行い」の結果として生じたエネルギーを最深部に蓄えたまま、心は次の身体に移動するのです。次々と心が移転するうちに、このエネルギーはいつか現象化します。人間や動物が送る数多くの生涯で、心は数え切れないほど多くの「行い」に関与し、「善い行い」あるいは「悪い行い」を選択します。このような「行い」の結果が未来の生涯で「報い」として現れるのです。「善い行い」には「幸せな報い」が現れ、「悪い行い」には「辛い報い」が現れます。これが「行いと報いの対応法則」です。

この「行いと報いの対応法則」からは逃れようがありませんし、善いことをしようと思いつつ人間は誰もついつい悪いことをしてしまいますから、心に蓄積されたエネルギーがいつ現象化して恐ろしい「報い」として現れるか分からず、みんな脅えています。そして現に人生は苦しみに満ちています。同じ心がいつまでも機能し続けるのは、インド人にとりまして苦痛以外の何ものでもありません。できることなら心の移転を断ち切りたいところですが、それを実現するのは最も困難なことなのです。

生きることは苦しみであると考えられていますから、いつまでも心が機能し続けるということは、いつまでも苦しみが続くということです。永遠に続く苦しみの連続を断ち切ること

こそ、インドに起こったすべての宗教の究極目標でした。シヴァ教やヴィシュヌ教のような正統派宗教では、最高神と見立てたシヴァやヴィシュヌに自己を同一化することによって目標を達しようとしています。神の存在を認めない異端の仏教では、心が死を越えて機能するのを停止しようとしています。「究極の真理」に到達して、死と共に心が機能しなくなれば、「究極の解放」が得られ、苦しみ of 生涯が繰り返されることはもうありません。

こうして、「心の移転」の停止に成功した人は“ブッダ”と呼ばれます。仏教を信じる人々にとりまして、ブッダになることは飛び抜けて困難なことで、最も実現が難しいことです。2600年前にシャーキャ部族国家の元王位継承者がブッダになって以来、これに成功した者は一人もいないのです。そして、1億年や10億年程度の近未来に次のブッダが現れる可能性はありません。

A² ブッダになる可能性

仏教では「行い」が三つの局面でとらえられます。体を用いる局面と声を用いる局面と心を用いる局面です。体を動かす行動は声を出す意志表明を前提とし、声を出す意志表明は心でなされる思考を前提とします¹⁾。体を動かすことは心で判断することを抜きにして考えられていないのです。自ら動く動物には必ず心が宿り、自ら動かない植物には心が宿りません。仏教では動物だけに「心の移転」が起こり、ブッダになる可能性があります。

さて、仏教には“すべての動物はみなブッダになる”という意味の言葉があります。では、どんな動物でも無条件で今直ちにブッダになれるかということ、決してそうではありません。ブッダになるには途方もなく長い準備期間が必要とされます。「ブッダになる決心」をしてから実際にブッダになるまでに要する時間は 3×10^{32} カルパと言われます。“カルパ”というのは、途方もなく長い時間を測定するのに用いられる時間単位です。一つの宇宙が発生してから消滅までに経過する時間が1カルパで、4320000000年と計算されます。

これほど長期にわたって弛まず準備を続けなければならないのです。ブッダになる準備には二つの局面があります。知恵を磨いて「究極の真理」を完全に理解すること、これが一つ目の局面です。そして、自分の準備だけに専念するのではなく、他人が準備をするのを助けること、これが二つ目の局面です。

チンパンジーの身体は、ブッダになる準備をする上でかなり不利です。大脳の言語中枢が発達していませんので、ブッダの教えを聞かされても、反応することがありませんし、「究極の真理」の会得に備えて知恵を磨くどころではありません。また、ほかの者もブッダになれるように側面から協力することが要請されていますが、チンパンジーの身体は、これを実践するのにいささか不便な構造をしています。知恵を磨いたり、他の者がブッダになるを助けたりするには、やはり人間の身体が望ましいようです。

1) 『首楞嚴三昧經』、『大正新脩大藏經』15, p. 635: 身業隨口 口業隨意

「すべての動物はみなブッダになる」にしても、どの動物でも直ちにブッダになるというわけにもいかず、やはりその前に先ず人間の身体に心が移ることが考えられます。人間の身体に移らないことには、「ブッダになる決心」をするのもままなりません。そうはいっても、望ましいからといって、次の行き先を心が勝手に選ぶことはできず、どのような身体に移転するかは、「行いと報いの対応法則」によって自動的に決まります。ブッダになる準備がしやすい身体に心が移るには、「善い行い」をしなければならないのです。

ナメクジウオ程度の身体に次々と心が移動して、百兆回や千兆回ほど生涯を繰り返したところで、一回でも「善い行い」ができそうもありません。しかしながら、ひょっとして千兆一回目に偶然に「善い行い」らしいことをしないと限りません。万一そういうことがあったら、カモノハシの身体に心が移るかも知れません。そこでカモノハシなりに頑張れば、いつか遙か遠い未来に遙かにましな身体に移るかも知れません。新しく移ったのが人間の身体であったらしめたものです。人間としての生涯を送っている間に、ブッダになる準備をどんどん進めればよいのです。こうして頑張り続けて、 3×10^{32} 回ほど宇宙が生滅を繰り返すのを待てば、めでたくブッダになることができます。

A³ ブッダになる準備をするのに不利な身体

人間以外の動物の身体に心が宿っている限り、ブッダになる準備をするのが難しく、準備を効果的に滞りなく進めるには、ぜひとも人間の身体に心が移動する必要があります。では、人間の身体であれば何でもよいのかと言うと、そうではありません。人間の身体にもいろいろあります。ブッダになる準備がし易い身体としにくい身体があるのです。

インドで作られた仏教文献によりますと、健康な人の身体と比べて、生まれつき障害のある人の身体は、ブッダになる準備をする上で不利であると言われています。そして、男の身体と比べて、女の身体は不利であると言われます。一般的に体力が低いことが指摘されますが、特に強調されるのは出産に関連して女の身体に起こる生理学的事象です。

『阿閼佛國經』に興味深い記事があります。それによりますと、“アクショービヤ”（阿閼）という名前のブッダがいる「ブッダの国」（佛國土）へ行きますと、女の身体に特有の苦痛と不快から逃れることができます。女たちにとりまして、そこは理想の環境であり、出産にかかわる障害から解放されて、心置きなくブッダになる準備に集中できます。

諸の〔阿閼佛刹の〕妊身の女人、皆安隱に産む²⁾。

阿閼佛刹の女人、妊身となり、産む時、身、疲極せず³⁾。

亦、臭処、惡露有ること無し⁴⁾。

アクショービヤの国へ行かない限り、女たちは月経や妊娠に伴う悪阻や出産時の苦痛など

2) 『阿閼佛國經』上、『大正新脩大藏經』11, p. 753: 諸妊身女人 皆安隱産

3) *ibid.*, p. 756: 阿閼佛刹女人 妊身産時身不疲極

4) *loc. cit.*: 亦無有臭處惡露

から逃れることができないのです。『阿閼佛國經』には、続いて“〔阿閼佛刹で、〕盲者、視るを得。聾者、聴くを得⁵⁾”という言葉が見えます。妊娠して子供を産むことは、視覚や聴覚に障害がある場合と同じように大きな苦痛でありまして、この世で女の身体をとった場合は逃れようがありません。何しろ、出産の際には死ぬことさえあるのです。女たちは女の身体を嫌ががって、どこかよそへ移りたがります。

九月の中に子を懐^{ここのつき}みて身^{うち}に在^はれば、衆患、一に非ず。其の生るる時に及べば、大苦痛を受け、命も自ら保たず。是の故に、女人、應に女人の身に厭離を生ずべし⁶⁾。

悪阻でひどく苦しんでいたたり、出産で疲労困憊しては、はるか遠い未来の目標を目指して努力する気になりません。女の身体をしていると、月経や妊娠や出産に伴う不快感と苦しみがあります。これが「女の身体に特有の不利な点」であり、そのせいでブッダになる準備がはなはだ滞ります。

もっとも、ブッダになる準備を進めている間なら、このことは大した問題ではありません。何しろ準備期間は $(3 \times 10^{52}) \times (432 \times 10^7)$ 年もあるのですから、そのうちたかが数十年の生涯などほとんどゼロに等しい長さです。それどころか、百兆回や千兆回くらい女として生まれたところで、ブッダになる準備全体に支障が生じるわけではありません。それに、女の身体が準備に不利であるといっても、人間の身体とチンパンジーの身体との差と比べれば、男の身体と女の身体との差はとるに足りません。悪阻や出産による不利があるといったところで、それを十分に埋め合わせて男以上に成果を上げる女はいくらでもいます。

女の身体について不利な点が問題になるのは、ブッダになる直前の生涯、 $(3 \times 10^{52}) \times (432 \times 10^7)$ 年にわたる準備期間が終わりかける最後の生涯でのことです。この時は最も有利な身体に心が宿らなければなりません。シャーキャ-ブッダ（釋迦佛）も前世では何回も女として生涯を送りましたが、最後の生涯では男として頑張りました。ゴール直前にラスト・スパートをかけるためです。

最も実現が困難な目標はブッダになることです。次に困難なのは天国の皇帝インドラや世界を創造したブラフマンになることです。このように実現が最も困難な目標を五つ挙げたりストがよく知られています。最も困難な目標に到達する直前には、最も有利な身体に心が宿っていなければなりません。ブッダやインドラやブラフマンになる直前の生涯では、ラスト・スパートをかけるために、心が男の身体に宿らなければならないのです。

B 八歳の娘がブッダになった話

さて、『法華經』のインド本『サツダルマブンダリーカ』では、第11章の末尾に近い箇所に「サーガラの娘」という興味深いエピソードが見られます。ナーガの王サーガラには八歳

5) *ibid.*, p. 753: 盲者得視 聾者得聴

6) 『轉女身經』、『大正新脩大藏經』14, p. 919: 於九月中懷子在身 衆患非一 及其生時 受大苦痛 命不自保 是故 女人應生厭離女人之身

の機敏な娘がいて、『サッドルマプンダリーカ』を教わったところ、たたまちのうちに「究極の真理」を我がものとして、ブッダになりました。これはめったにない驚くべき出来事でありました。

海の底にあるナーガの国から帰って来たマンジュシュリーは、指導の成果を報告して言いました。「ナーガの王サーガラには八歳の娘がいるが、私が『サッドルマプンダリーカ』を教えたところ、究極の真理を会得した。」

その際に居合わせたプラジュニャークータは、この報告に疑念を抱いて言いました。「シャーキャ-ブッダでさえ、限りないほど生まれ変わって、究極の真理を会得するのに途方もなく長い時間をかけている。サーガラの娘が一瞬のうちに究極の真理を会得したなどという話は誰も信じない。」すると、サーガラの娘自身が登場して言いました。「私はすでに身体にブッダの特徴が備わっています。私は究極の真理を会得してブッダになったのです。」

これに対してシャーリプトラは「今まで女がブラフマンやブッダなど五つのものになったことがない」と言って、娘の主張を退けようとしていました。すると、サーガラの娘は自分の身体に女の器官が消えて男の器官が生じているのを見せました⁷⁾。

女の身体をとったまま、女という不利な身体に心が宿ったまま、ブッダになることはできません。シャーリプトラが問題にするのは、今たまたま女の身体をとっている以上、サーガラの娘が直ちにブッダになるはずがないということです。

未曾有の経典を教わった娘は、たちまちのうちに「究極の真理」に到達しました。これがまりにも速かったので、死んで心が男の身体に移動する余裕などありませんでした。とは言っても、「ブッダになる直前には心が男に身体に宿る」という原則が厳然としてある以上、女の身体のままではいけません。そこで、ブッダになるのに連動して瞬時に性転換が起こり、間一髪で原則の破綻は避けられました。

性転換が起こったことを知って、シャーリプトラの疑念は氷解しました。ブッダになった時点では、もはや女の身体をとっていないのです。このエピソードの主旨は、女の身体をとったままブッダになれることを示すことにあるではありません。

果てしなく長い準備期間が、ここでは極端に短い時間に圧縮されているのです。この異常な速度こそ、シャーリプトラが怪しんだ点であり、これが「サーガラの娘」の主題になっています。この異常な速度をもたらしたのは、この経典の恐るべき力でありました。そのことを示すことこそ、「サーガラの娘」の主旨でありました。

『サッドルマプンダリーカ』で、サーガラの娘が「究極の真理」を会得したことに疑念を抱くシャーリプトラは、「女の身体のままでは就けない五つの地位」に言及します。テキストには、「五つの地位に女が[今まで就いたことはなかったし、]今も就くことはない」とい

7) *Saddharmapundarikasūtra*, ed. Kern & Nanjio, St.-Petersbourg, 1909, pp. 261-266.

う意味の文があり⁸⁾、その直後の文に女が就いた前例のない五つの地位が挙げられます。

クマーラジーヴァ (鳩摩羅什) は、406年に『妙法蓮華經』という表題でこの文献の中国語訳を出しました。そこで問題の文は“女人身有五障”(女人の身に五障有り)と訳されています⁹⁾。「五つの地位に就くことはない」という意味の表現は、「[五つの地位に就くには、それぞれ差し支えがある。これを合わせると]五種の差し支えがある」という意味の表現に変わっています。そして、元の文にはない“身”が加えられています。身体に言及していることは、インド人読者にはわざわざ言うまでもないことですが、「行いと報いの対応法則」に親しみのない中国人読者には、念を押しておく必要があったのです。

C¹ 仏教の体系が眼中にない最澄

『妙法蓮華經』を拠り所として天台宗を創設した最澄(767-822)は、「サーガラの娘の話」に特に強い関心を寄せました。そして“女の身体でブツになった前例がない”というシャーリプトラの疑念を取り上げて、この仏教文献の作者も訳者のクマーラジーヴァも考えてもいなかった方向に論議を展開しました。

最澄にとりまして、この娘が本来ならブツになれるはずがないのは、女であるからだけではありません。女であること以外に二つの原因があるのです。一つは人間でないことです。もう一つは年少であることです。サーガラの娘は女であるだけでなく、海の底に住むナーガであり、わずか八歳の子供です。最澄が言うには、ナーガは人間ではありません(畜生)からブツになれません。そして年少でありますからブツになれません。

當に知るべし。此の文、難成の趣を明らかにし、怪力の用を顯はす。六趣の中、是れ畜生の趣なり。不善報を明かにす。男女の中、是れ則ち女身なり。不善機を明かにす。長幼の中、是れ則ち少女なり。不久修を明かにす。然りと雖も、妙法蓮華の甚深微妙の力、具に[智と徳の]二嚴用を得。明かに知る。法華の力用、諸經中の寶にして、世に希有なる所なる¹⁰⁾。

最澄の立場から見ると、サーガラの娘は三重にブツになることが困難なのです。このように最もブツになれそうもない者がブツのなれたのは、ひとえに『妙法蓮華經』に内在する超自然力のお陰です。そして、そのような奇跡の『妙法蓮華經』を依り所とする最澄の天台宗は、他の宗派とは比べようもない絶対無比の存在なのです。

龍女、成佛して、化す所、巨多なり。法華の力、今日已に顯れたり。一切の衆會皆悉く見ることを得。是の故に、默然信受す。他宗所依の經には、是の如きの信受無し。天台法華には、是の如き信受有り。卽身成佛、化導の義、寧ろ他宗に勝れざらむや¹¹⁾。

8) op. cit., p. 264: pañca sthāni stry na prāpnoti.

9) 鳩摩羅什, 『妙法蓮華經』4, 『大正新脩大藏經』9, p. 35.

10) 最澄, 『法華秀句』, 『傳教大師全集』3, p. 261: 當知 此文明難成趣 顯怪力用 六趣中 是畜生趣 明不善報 男女之中 是則女身 明不善機 長幼中 是則少女 明不久修 雖然 妙法蓮華甚深微妙力 具得二嚴用 明知 法華力用 諸經中寶 世所希有

インドで想像されたナーガは美しい顔をしていて、身体の大部分は人間ですが、末端部のみが蛇です。心優しくて賢く、シャーキャ-ブツダが『妙法蓮華經』を説いた時、人間たちや神々とともにいくつかのナーガがいました。ブツダの教えが理解できるのです。仏教で伝えられるナーガは、ブツダになる準備が困難な「畜生」ではありません。サーガラは特に優秀で、誰よりも記憶力と理解力に優れ、この上なく憐れみ深く、真理を会得しようとする強い意志がありました。このナーガ娘に可能であったからといって、そこいらを歩き回っている凡庸な犬や猫にもできるわけではありません。「ナーガ娘の話」は、人間以外の動物の身体のままブツダになる可能性を保証するものではないのです。

ところが“ナーガ”は中国で“龍”と訳されました。最澄の念頭にあった異形の爬虫類は、荒々しい鱗で覆われ、四本の足に鋭い爪があります。ワニやトカゲ並の知能しかない爬虫類の化け物がブツになれる以上、どんな動物もそのままの姿でブツになれるということになります。どんな超自然力を用いようとも、仏教ではありえないことです。

最澄が言うには、人間以外の動物の身体をとっていたのでは、ゼンゴフ（善業）を重ねることが容易でなく、ゼンゴフの究極的な報いとしてのジャウブツが困難です（不善報）。このように、人間以外の動物はジャウブツが困難な存在（難成趣）です。しかしながら、最澄によりますと、『妙法蓮華經』に潜在する超自然力が発動すれば、人間以外の動物もそのままの姿でジャウブツできます。仏教では人間以外の動物がブツダになる準備をすることさえできませんが、最澄が言うにはそのままの姿でブツになれるのです。

最澄によれば、年少者は修行を始めてから年月が経っていないので（不久修）、長い修行を要するジャウブツはできません。「年少者はだめ」ということは、「年とってからなら大丈夫」ということです。最澄の考えている準備期間は一つの生涯の中での話で、せいぜい数十年のことです。仏教で考えられているのは、 3×10^{28} 回も宇宙が生滅を繰り返す時間ですから、最澄の念頭にあるのとはスケールがまるで違います。最澄の考えているジャウブツは、無限に続く「心の移転」を前提としないプロセスなのです。それに、八歳を年少者の年齢とするのは、サーガラの娘が人間あるいは人間に準じることを前提にした判断であり、八歳の爬虫類が年少であるのかどうか大いに疑問のあることです。動物の寿命は種によってまちまちです。自分がナーガを出来の悪い爬虫類と見なしていることを最澄は忘れていません。

最澄にとりまして、サーガラの娘のエピソードは、三重の障害があって最もジャウブツしそうな者がジャウブツする奇跡の物語です。この奇跡を説明するために、最澄は“ソクシン-ジャウブツ”（即身成佛）¹¹⁾ という語を使います。「今の身体のままブツダする」ということです。チクシャウはチクシャウの身体のまま、女は女の身体のまま、そして子供は子供の身体のままブツダが可能なのです。

11) *ibid.*, p. 267: 龍女成佛 所化巨多 法華之力 今日已顯 一切衆會 皆悉得見 是故默然信受 他宗所依 經 無如是信受 天台法華宗 有如是信受 即身成佛 化導之義 寧不勝於他宗哉

12) 最澄はこの語を中国の湛然から借りたようです（『法華文句記』、『大正新脩大藏經』34, p. 314）。

ところが、インド文献の中国語訳『妙法蓮華經』の中で、そんなことは話題にさえなっていない。言葉も知らない動物にブッダになる可能性があるといっても、いつか遙か未来に心が人間の身体に移った上でのことで、チンパンジーが今すぐブッダになるわけではありません。ブッダになる直前に女の身体に心が宿っているのは、とてもラスト・スパートはききません。年少者が老人になったところで、ブッダになりやすくなるというものではありません。男の身体はブッダになる準備はしやすいのは確かですが、男であるからといって、今すぐブッダになれるわけではありません。

「心の移転」を前提とする仏教では、今たまたま女の身体をしていても、未来の生涯に期待することができます。この点につきまして、『妙法蓮華經』の訳者クマーラジーヴァは、“ブッダになれない”と聞いて女がやる気を失うのを気遣い、この問題を別の所で取り上げて、女以外の身体に心が移る可能性に言及しています。

女人、佛に作るを得べし。女の身を轉ぜざるにあらず¹³⁾。

このような気遣いは最澄に全くありません。仏教で当然の前提とされる「心の移転」は、最澄の念頭にないのです。細かいことをいろいろ知ってはいても、最澄は肝心の所で異文化を理解していません。

C² インド文化を接合しようがない日本文化

読み違いを直してくれる指導者がいないまま、最澄は独力で仏教文献を読みました。何しろ異文化の所産ですから、最澄の想像を越える記述に満ちていましたが、自分たちと違った風に考える人々がいるということさえ、想像することもできませんでした。想像を絶する記述は、生まれ育った日本文化圏の通念に合うように理解するしかありませんでした。

女の身体がブッダになる準備をする上で不利であったところで、絶望の思いに駆られる女は仏教文化圏にいません。仏教で女の身体は不利と見なされていますが、「心の移転」が前提にした上でのことです。男であれ女であれ、仏教を信じている者なら、今の人生でブッダになれるなどは思っていません。インド人に与えられている無限の時間を考えれば、今たまたま女の身体をしていることは、それほど深刻な問題ではありません。

今たまたま不利な身体をとっていても、「心の移転」を重ねて行くうちに有利な身体をとって、心行くまで準備に専念して遠い未来にブッダになることができます。もしそうでないなら、過去に一度でも病人や女として生まれたことがあれば、たとえその後何回も男として生まれたとしても、ブッダになる見込みはないことになりましょう。実際にはその逆で、シャーキャ-ブッダも以前に何度も女として生涯を送りました。

仏教で“女がブッダになれない”と言うのは、「ブッダになる直前には心が女の身体に宿ってはいならない」という意味ですが、「心の移転」に縁がない文化の中に育った最澄に

13) 鳩摩羅什、『大智度論』56、『大正新脩大藏經』25, p. 459: 女人可得作佛 非不轉女身也

とりまして、今の人生が終わった時にブツになれなければ、それですべてはお仕舞いです。日本人にとりましては、女にブツになる差し支えがあるとすれば、もう救いようがないわけです。日本では「死んだ後で心がいつか男の身体に移転する」という考えを受け入れようがないのです。

仏教で問題になっているのは女の身体であって心ではありません。同じ心が人間の身体に移ったり、カモノハシの身体に移ったりしますし、男あるいは雄の身体に移ったり女あるいは雌の身体に移ったりします。女に固有の心やカモノハシに固有の心などないのです。ところが、「心の移転」が視野にない最澄にとりまして、「同じ心が違う性や違う種の身体に移って当たり前」というアイデアは、受け入れられるものではないのです。

仏教でブツになる可能性があるのは動物だけです。ところが、森羅万象にタマ（霊）が宿る日本では、草や木もブツになります。さらには、石や岩もブツになります。それどころか、瓦や塀もブツになります。「行いと報いの対応法則」を気にしない日本人が構想するブツですから、植物のように自ら動かないものでも、鉱物や人工製品のように生まれ死ぬことがないものでも、ブツになるのは一向に差し支えないのです。日本文化圏で“ブツ”と呼ばれているものは、仏教とは全く違った世界観を反映するものです。日本人がブツを熱心に礼拝するという事実は、日本が仏教国である論拠ではありません。

森羅万象がブツになる中で、人間の女だけがブツになれません。『妙法蓮華經』のイリキ（威力）に頼れば女も絶望というわけではないにしても、何の努力をするすべのない植物や鉱物が自動的にブツになれるのに、万物の中で人間の女だけが恐るべき努力をしなければなりません。そのイリキが現れ出るほど熱心に、全身全霊を打ち込んで『妙法蓮華經』に帰依しなければならないのです。一方では“女はブツになれない”と言い張り、他方では“森羅万象がブツになる”と言って、むきになります。その場その場でいい加減なことを言っているのです。最澄とその後継者たちの言うことには体系がありません。

D 責められ蔑まれて逃げ場のない日本の女

“五障”という語が『妙法蓮華經』から抜き出され、サーガラの娘の伝承から切り離されて、日本文化独特の文脈で意味が付加されるようになります。このような状況ができたのは、アミダ（阿彌陀）について語られる『無量壽經』が読まれるようになってからのようです。アミダ信仰が盛んになるにつれ、「再び女として生まれないようにしてやろう」というアミダの「前世の決心」（本願）が知られるようになり、「サーガラの娘の話」が関心を引いたのでしょう。

『無量壽經』を重んじて浄土教を創設した法然（1133-1212）は、“障”を“サハリ”と読んで「さしつかえ」と理解し、“過”を“トガ”と読んで「過ち」と理解します。そして、この二つの漢字を並べて“女人は過多く、障り深し”という対句を作ります。こうして、サハリとトガのセットが原因となり、あらゆる所で女は排斥されることとなります。

女人は過多く障深くして、一切の處に嫌はれたり¹⁴⁾。

そのために、女はボンテン（梵天）やタイシャクテン（帝釋天）になることができず、マワウ（魔王）やテンリンワウ（轉輪王）になることさえできません。ましてや、女がブツになることなど、口にするのが憚られ、考えるのも恐ろしいくらいです。

天上天下のなほ賤しき生死有漏の果報をうけ、無情生滅の拙き身にだにも成ぜず、いかにはんや佛の位をや。申すに憚りあり、思へば恐れある¹⁵⁾。

日本文献には“ゴシャウノ-ツミ”という表現が見られ、シャウ（障）はツミの特殊形態とされます。そして、光を遮る雲や霞に比せられて、払うべきものと見なされます。さらに、ゴシャウノ-クモ（五障の雲）またはカスミ（五障の霞）は、ツミノ-クモ（罪の雲）とともに、シンニョノ-ツキ（眞如の月）に対立させられました。

あらあさましや、あの者をうち殺さんも恐ろしや、さなきだに、女は五障の罪深きにとて、涙を流し給ひける¹⁶⁾

われも五障の雲晴れて、眞如の月の影を、眺め居りて明かさむ¹⁷⁾。

「懺悔に罪の雲消えて、眞如の月も出でつべし。」「五障の霞の晴れ難き、春の夜のひと時、胡蝶の夢の戯れに、いでいで（さあさあ）有様見え申さん¹⁸⁾。」

“サハリ”という語は“ツミ”という語と交替可能でありました。そして蓮如によりますと、「五障の女質」は「悪逆の凡夫」と並ぶべきものでありました。五つのシャウのせいで、最悪の犯罪者と同じ扱いを受けることになったのです。

阿彌陀如來コソ、ヒトリ无上殊勝ノ願ヲヲコシテ、悪逆ノ凡夫、五障ノ女質ヲハ、ワレタスクベキトイフ大願ヲハオコシタマヒタリ¹⁹⁾。

古代の日本には“サンジュウ”（三従）という言葉が知られていました。これは中国文化圏に由来し、子供の時は父に、結婚してからは夫に、年をとってからは息子に、女は一生を通じて三人の男に服従しなければならず、常に「自由」がないとされます。この“サンジュウ”が“シャウ”と組み合わせられて、“ゴシャウ-サンジュウ”という表現が作られました²⁰⁾。外から社会規範として女に課せられるサンジュウと女の心に内在するゴシャウとが並列されて、女のフカキ-ツミの原因とされたのです。サンジュウもゴシャウも、女にとって逃られない宿命と考えられたのです。

十方世界に女人有る處には、即ち地獄有り。……しかのみならず、内に五障有り、

14) 法然、『無量壽經釋』、『昭和新修法然全集』, pp. 75-76: 女人過多障深 一切處被嫌

15) *ibid.*, p. 76: 天上天下尚賤生死有漏果報 無情生滅拙身不成 何況佛位哉 申有憚思 有恐

16) 『御伽草子』、『日本古典文学大系』38, p. 200.

17) 『三井寺』、『日本古典文学大系』41, p. 390.

18) 『舟橋』、『日本古典文学大系』40, p. 136.

19) 蓮如、『諸文集』101, 『眞宗史料集成』2, p. 222.

20) 『超日明三昧經』に、女の身体をしてはブツダになれない理由として、「五事礙」と並んで「三事隔」が挙げられ、“少制父母 出嫁制夫 不得自由 長大難子”と言われます（竺法護、『超日明三昧經』、『大正新脩大藏經』15, p. 541）。“不得自由”とは言われますが、罪であるとは見なされません。この部分は、『妙法蓮華經玄贊』にも引用されています（*loc. cit.*, p. 817）。

外に三従あり²¹⁾。

忝く彌陀の本願に乗じて、五障三従のくるしみをのがれ、三時に六根をきよめ、一すじに九品の淨利をねがふ²²⁾。

ソレ女人ノ身ハ、五障三従トテオトコニマサリテカ、ルフカキツミノアルナリ²³⁾。

仏教で女の身体に認められる「不利な点」のせいでブツダになる準備に能率が上がらなくても、あわてることはありません。「心の移転」が信じられているインドでは、時間が無限にあるのです。それに、欠陥があると言われているのは、インド人から見れば取り替えのきく身体であり、取り替えのきかない心ではありません。この「不利な点」があるからといって、逃げ場がないほど女が追い詰められているわけではないのです。

ところが、日本の女には逃げ場がありません。ゴシャウは逃れようのない宿命であり、人間の力ではどうにもなりません。そして、「心の移転」と無縁の文化圏では、未来の生涯に期待することはできず、一時的に機能する身体と永遠に機能する心を区別することがありませんので、身体に限られる「不利な点」を想定することができません。

こうして、たまたま今の身体に認められる「不利な点」は、逃れようのない心の欠陥に変換されました。逃げ道を断たれた女には、超越存在に潜む超自然力しかありません。最澄が期待したのはホケキヤウに潜む超自然力であり、テキストの一部を朗読してこれを引き出す方法を考えました。蓮如が期待したのは、アミダ-ブツに潜む超自然力です。

コノホトケヲタノマスハ、女人ノ身ノホトケニナルトイフコトアルベカラサルナリ²⁴⁾。

そして、最後の抛り所とされるアミダ-ブツの方も、自分の職分をよく心得ていまして、“悪逆ノ凡夫、五障ノ女質ヲハ、ワレタスクベキトイフ大願ヲハオコシタマヒタリ”と言われていきますように、人間の手に負えないトラブルを解消する救済者として、大いに頑張る用意があったのです。

こうして、古代日本で作り上げられたブツダウ（佛道）の権威のもとに、恐るべき心の欠陥と厳しい社会制約を女に規定する言葉“ゴシャウ-サンジュウ”が成立し、日本文化の中に深く根付いていきました。これが日本で女の立場を律する原理となったのです。そして、今日に至るまで仏教に起源があることに疑いを抱く日本人はいませんでした。

「心の移転」を信じるインド人にとりまして、性別が認められるのは身体だけですから、女に固有の心などありえないことです。しかしながら、この異分化文化の体系は日本人にとりまして想像を絶するものでありました。

E 異文化から語を受け入れても意味を受け入れない日本人

最澄が読もうとした異文化文献には、異文化の概念と表す語が数多く用いられていて、日

21) 法然, op. cit., pp. 75-76: ……十方世界有女人處即有地獄……内有五障外有三従

22) 『平家物語』、『日本古典文学大系』33, p. 435.

23) 蓮如, 『諸文集』215, 『真宗史料集成』2, p. 299.

24) loc. cit.

本の文化体系とは全く異なる文化体系が記述されていました。しかしながら、それを読み解く訓練を最澄は受けていませんでした。日本には仏教の文献が多量に伝えられましたが、そこに記述される異文化の体系を理解でき解説できる人はいなかったのです。

日本文化を考える際に注目すべきことは、最澄の誤解が個人のへまに終わらなかったことです。日本人の通念に添って異文化の文献を読んだのですから、その解釈は日本人によく理解できました。そして、最澄が仏教を正しく理解していないことに気づいた人は事実上いませんでした²⁵⁾。研究者としての最澄は1000年以上も無条件で支持されたのです。

仏教でブツになるのは、この世で最も難しいことです。それを実現するには、 3×10^{32} 回も宇宙が発生と消滅を繰り返すの待たなければならないのです。しかしながら、そんなことは日本人の知ったことではありませんでした。そして、シャーキャ-ブツダの後はブツになった者がいないことも、日本人の知ったことではありませんでした。日本ではブツになるのに何の努力も要らず、死ねば全員がブツになるのです。

仏教でブツになる可能性があるのは動物だけですが、日本では草や木もブツになりますし、石や岩どころか瓦や塀さえブツになるのです。日本人は“佛”という語を受け入れても、この語が表す概念は受け入れませんでした。仏教という異文化を体系として理解することがなかったのです。

このように、日本のブツと仏教のブツとは次元を異にします。“ブツ”という最も重要な術語がそうですから、後は推して知るべしです。仏教の体系を形成する項目のすべては、語だけが伝わって意味は伝わりませんでした。日本文化圏に展開したブツダウは、インドに起こった仏教とは別の体系なのです。

日本では安定こそ本来の状態であり、安定の破綻は異常事態です。ブツになること（ジャウブツ）は、タマが安定を取り戻すことです。異常事態を解消して本来の安定を取り戻すのに、音声呪術が有効なパフォーマンスと考えられ、仏教文献が朗読されます。日本人は“成佛”（ブツダウになること）という語を仏教文献から借用して、音声呪術を使ってタマの異常事態を解消するプロセスを“ジャウブツ”と呼びます。日本人が仏教文献を熱心に朗読するという事実は、日本が仏教国である論拠ではありえません。

日本語の“ブツ”が指すのは「鎮められたタマ」です。人が死んだ場合に日本人が気にするのは、恨みを晴らそうとしてタマが報復をする可能性です。これを封じるために音声呪術を使ってタマを鎮め、強制的にジャウブツさせます。何の努力をせずとも、死ねば全員がブツになるのは当然です。日本人が一人残らずブツになるという事実は、日本に仏教が根付かなかったことを如実に証拠づけるものです。

25) 唯一の例外は證眞（1130?–1207+ α ）です。文献根拠を欠くという理由で、そして論理的に成り立たないという理由で、證眞は日本オーソドクシーの「草木成佛」を見事に批判しましたが、当時は完全に無視されましたし、現在も関心を寄せる人はいないようです（小林信彦、「證眞の日本オーソドクシー批判—虚心に文献を読んだ研究者の見事な成果—」、『〔桃山学院大学〕国際文化論集』33, 2005, pp. 57-67）。

F 学問のすゝめ

岡倉天心（1862-1913）は“アジアは一つ”と絶叫しましたが、その際に唯一の根拠とされたのは「仏教」という架空の存在でした。残念なことですが、何も考えずに「アジア文化圏」の存在を薄ぼんやりと信じているという点で、今も日本人の基本態度は岡倉と大して変わっていません。

日本で展開された文化とインド文化とのかかわりについて、「アジア」における日本文化の位置付けについて、日本人は相変わらず現実離れした幻想の中に生きています。“聖徳太子が仏教文献を研究して注釈を書いた”とか、“中国へ行った空海がサンスクリットを学んでタントラ仏教を日本に取り入れた”とか、途方もない話が声高く語られています。極めて重要な局面で、日本人が行う日本文化研究はまだ近代以前の段階にあるのです。

日本文化の本質にかかわる問題で、日本人はあまりにも長らく怠けていました。国文学や国史学や仏教学など、既成の分野の手に負えないとすれば、非常に大きな課題が手付かずのまま新興の国際文化学に任されることとなります。若い皆さんの奮起を望みます。もっとらしい話題には耳を貸さず、古い日本の文献を広く読み、仏教文献を参照して関連項目を詳しく点検し、ひたすら基礎研究に励んで下さい。

そして、ヨーロッパの言語を学習して、仏教研究の超先進地ヨーロッパで生み出された大きな成果を吸収して下さい。仏教が日本に根付いていなかったとすれば、厳密な対比作業を進めるために、仏教文献の知識が不可欠です。もし仏教が日本に根付いていたという主張をどうしても貫きたいとしても、それを事実として確認するために仏教文献の知識がやはり不可欠です。

仏教文献の研究は19世紀のヨーロッパで起こり、優れた研究者が次々に現れて、極めて水準の高い成果が数多く蓄積されました。主要な仏教テキストが入念に校訂されて正確にヨーロッパの言語に翻訳され、数多くの優れた論文や著書が世に出たのです。そして今も数多く出ています。

日本でも「文明開化」の一環として仏教研究をヨーロッパから取り入れようとしたのですが、研究は遅々として進みませんでした。インド世界と言語系統を同じくするヨーロッパ人と比べて、日本人は極めて不利な条件で文献を読まなければならなかったのです。そして、すでに膨大な量に達していた研究成果は、日本人には容易に近づけないヨーロッパの言語で書かれていました。それに、インド起源の世界観を継承しているという思い込みが日本人にありまして、仏教を異文化として扱うことができず、そのために研究の正常な発展が著しく妨げられました²⁶⁾。そして今も著しく妨げられています。

26) 基礎知識が身につけていなかった鈴木大拙（1870-1966）は、仏教文献を正確に読めず、テキストに記載のないことを仏教と思い込んで勝手な解釈をしています（*Outlines of Mahāyāna Buddhism*, London, 1907）。このような鈴木の良い加減な研究姿勢は、ド・ラ・ヴァレ・ブサン（Louis de la Vallée

例えばキリスト教徒の国にしてもヒンドゥーの国にしても、それぞれの宗教について人々は知らず知らずのうちに知識を身につけます。そして、自分の国がキリスト教国あるいはヒンドゥー教国であることを強調したがるほどの知識人なら、それぞれに宗教についてそれなりの学識があります。ところが、“仏教国”と言われる日本では、人々が仏教について知識を自然に身につけることはありません。それどころか、何の関心もないのが実情です。このことは今に始まったことではなく、仏教文献がよく読まれたと言われる平安時代も、状況は現在と大して変わりはありませんでした²⁷⁾。

日本を仏教国と決めつける知識人にしても、何か根拠があってそう考えているわけではなく、ただ薄ぼんやりと何となく、みんながそう言うから、そう言っているに過ぎません。日本文化の重要な局面について、何も知ろうとせず、何も考えないまま、この人たちは無責任に勝手なことを言っているに過ぎないのです。

自分が継承する文化に対する姿勢として、このいい加減さはただ事ではありません²⁸⁾。日本文化の研究をさらに発展させるには、このような状況をいつまでも放置することはできません。昔から伝わる神話や伝承にとられることなく、集団幻想に付き合うことなく、日本で“仏教”と呼ばれているものを本気で取り上げて、文献に即して正確に理解することがぜひとも必要です。

これは国際文化学の存立にかかわる問題です。日本文化の真の姿をとらえることなしに、日本人が国際文化学を打ち立てることはできず、日本で“仏教”と呼ばれているものの実態を明らかにすることは、そのために欠かせない基礎作業です。そして、この作業を進めることによって、国際文化学は学問全体に貴重な貢献することができるのです。重ねて若い皆さま

Poussin 1869-1937) に厳しく批判されました (*The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, London, 1908, pp. 885-894)。

仏教の基本的な項目について鈴木が加える説明は間違いだらけです。仏教と思い込んでいるのは、実は仏教でも何でもなく、日本文化を基にして独自に思いついたことに過ぎません。仏教文献を研究せずに仏教を論じているのです。それどころか、基本的な仏教術語さえきちんと覚えておらず、非常にしばしば綴りを間違えているほどです。

27) 平安時代の日本人にとりまして、テンヂク(天竺)は桜が咲き紅葉が映える国で、テンヂク人は山で採った栗や柿、そして海で採った鮑や鰹を好んで食いました。そしてブツダになることに何の関心もなく、もっぱらマコト-ノ-ココロ(誠心)を貴びました(小林信彦、「インド起源の話に描かれる日本の風景と文化」、『桃山学院大学]国際文化論集』28, 2003, pp. 39-76)。テンジクはもう一つの日本に過ぎないのです。

平安時代の人々の幻想の中で、テンヂク人は日本人と同じ風景を愛でて、同じ好物を食べていただけでなく、日本人と同じように考えていました。仏教という異文化が眼中になかったのに、平安時代の人々は仏教を信じているつもりでした。この点に限れば、現代の日本人にそっくりです。風景や食物のように目に見えるものについては、さすがに現代人の方が情報が豊富で、インド人が鮑や鰹を好むとは思っていないようです。

28) すでに100年近く前に、鈴木大拙はド・ラ・ヴァレ・ブサンから厳しい批判を受け、研究姿勢の致命的欠陥を指摘されましたが、これを克服しようとはしませんでした。それどころか、逆にすっかり開き直りました。ヨーロッパの仏教研究者が鈴木の名前を挙げることは二度とありませんでした。

ところが日本では、“現代仏教学の頂点をなす著作”(『日本的靈性』, 岩波文庫, 表紙カバー, 1999) などという言葉で、今でも鈴木が絶賛されています。そして、このように無責任な評価を見ても、誰も不審に思うことはありません。日本人の幻想の中で、日本は仏教大国であるだけでなく、何と学問大国でもあるのです。そうしますと、有名な鈴木大拙は世界一の大学者ということになります。

んの奮起を望みます。

付記: この文章を日本国際文化学会の年報に投稿したところ、極めて明確な理由で不採用となりました。編集委員会代表の熊田康章によると、先行研究の検討という「論文に不可欠な条件」を満たしていないとのこと。そう言えば、1866年に世に出た論文 *Versuche über Pflanzen-Hybriden* でも先行研究は全く取り上げられていません。グレゴール・メンデルに酷似する点を指摘されるのは悪い気がしないものの、夏の学会で親しくなった若い人たちとの約束も守らなければなりませんので、より高次の審査を受けるべく、改めて本誌に投稿することにしました。日本で国際文化学会が成り立ちえるかどうかは、熊田ではなく若い人たちにかかっているのです。

(初校の際に付記: 日本国際文化学会の会員のうち、面識のある人には抜き刷りをお送りしますが、ほかにも希望する人がいれば御連絡下さい。615-0925 京都市右京区梅津大縄場町6-6-3-1108 小林信彦)

The Japanese Saying That Women Are Sinful and Hopeless

Nobuhiko KOBAYASHI

According to the ancient Japanese, women can never be happy during their lives nor can they get peace after death, because their minds are full of inborn defects such as jealousy, frivolity or caprice. These defects are said to be sins, to which women themselves are solely responsible.

The Japanese ascribed the authority of this view to Buddhist scriptures. However, descriptions of such female defects are not found in Buddhist texts. Instead, female bodies are said there to be disadvantageous to preparation for becoming Buddhas, because of physiological phenomena connected with generative function, such as menstruation, morning sickness and labour.

Having read a Buddhist reference to disadvantages of female bodies, the Japanese of the ninth century mistook it for a reference to defects intrinsic to women's minds. And the well-known Japanese proposition, "Women are naturally sinful and therefore quite hopeless," was thus established to justify the Japanese society in tormenting women for more than 1000 years.